

慢性外耳道炎，悪性外耳道炎そして 悪性外耳道癌（SCC）の細菌検査結果等について

金 義 慶 南 豊 彦 中 川 のぶ子

多 田 直 樹 井 野 千代徳

関西医科大学付属香里病院耳鼻咽喉科

The analogy and differences between the external malignant otitis, the external malignant tumor and the chronic otitis media, including the bacteriological examination

Yoshinori KIM, Toyohiko MINAMI, Nobuko NAKAGAWA, Naoki TADA, Chiyonori INO

Department of Otorhinolaryngology, Kohri Hospital of Kansai Medical University.

The external malignant otitis and the external malignant tumor (squamous cell carcinoma) are both extremely rare, while the clinical symptoms are closely similar to each other. In addition, both patients often have the long treatment history for the external otitis or the chronic external otitis. It is possible that the chronic external otitis turns to the external malignant otitis or the external malignant tumor, were not originally intended.

The clinical feature of both the external malignant otitis and the external malignant tumor are the pain and swelling at the external ear canal, but on the other hand, those symptoms are also found in the patient of the chronic otitis media. The clinical differential diagnosis of those three diseases is quite difficult from the standpoint of the clinical. We considered the analogy and differences between the external malignant otitis, the external malignant tumor and the chronic otitis media, including the bacteriological examination.

はじめに

悪性外耳道炎と悪性外耳道腫瘍（扁平上皮癌）とは極めて稀な疾患であり，加えて臨床症状が極めて類似することも稀ではない．更に，両者は外耳道炎ないし慢性外耳道炎として長い治療歴を有していることでも共通する．そもそもが悪性外耳道炎として，あるいは悪性外耳道癌として発症している可能性もあるが，慢性外耳道炎が変化し悪性外耳道炎，或いは悪性外耳道癌になるとの捉え方も可能である．又，慢性外耳道炎と外耳道真珠腫との関係も興味あるところであるが，今回は慢

性外耳道炎と悪性外耳道炎，悪性外耳道腫瘍（扁平上皮癌）との関係に注目した．悪性外耳道炎と悪性外耳道癌の臨床上的の特徴は，外耳道の腫脹と痛みであるが，これらの所見・症状は慢性外耳道炎にも認められることであり時として3者の鑑別が容易でないことがある．そこで，慢性外耳道炎と悪性外耳道炎，悪性外耳道腫瘍（扁平上皮癌）の3者での共通点，相違点を細菌学的検査を含め検討を試みた．その結果について報告する．

対 象

悪性外耳道炎症例（以下、MOEと略す）は2例、悪性外耳道腫瘍（以下、SCCと略す）は9例、そして慢性外耳道炎が（以下、COEと略す）41例を対象とした。COEは、病悩期間が8週以上の症例とした。上記3者の年齢分布の比較をFig. 1に示した。MOEは2例とも65歳以上の高齢者であったのに対して、SCCでは全例中高年であった。一方、COEは中高年に多いものの若い人にも認められた。性差の比較をFig. 2に示した。MOEは2例ともに男性であり、SCCとCOEでは殆ど性差は殆んど認められなかった。

検 討 項 目

- (1)MOEとSCCの外耳道炎治療歴の有無について
- (2)MOE, SCCそしてCOEの病悩期間について
- (3)MOE, SCCそしてCOEの糖尿病合併率について

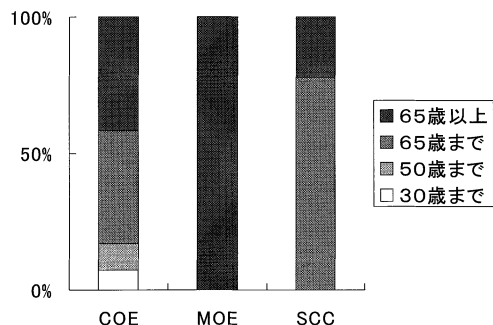


Fig. 1 MOE症例は高齢者で、SCC症例は中高齢者、COE症例は若い世代にも認められた。

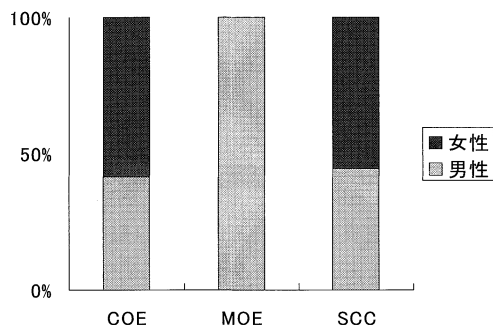


Fig. 2 MOEは男性のみで、SCCとCOEでは殆ど性差を認めなかった。

- (4)片側性か、両側性かについて
- (5)細菌検査結果について
- (6)その他

結 果

- (1)MOEとSCCの外耳道炎治療歴の有無について (Fig. 3)

MOEでは2例中2例が外耳道炎として治療歴を有していた。一方、SCCは9例中8例が外耳道炎の治療歴を有していた。残りの1例は慢性中耳炎にて治療を受けていた。

- (2)MOE, SCCそしてCOEの病悩期間について (Fig. 4)

外耳道炎としての治療歴を有したMOEの全例とSCCの8例はともに病悩期間は8週を超えていた。そこでCOEの41例を加え病悩期間を更に詳しく検討してみた。COEは病悩期間が10年を超

悪性外耳道炎 (MOE)	悪性外耳道腫瘍 (SCC)
1. 66歳男性 +	1. 50歳男性 +
2. 72歳男性 +	2. 59歳男性 +
	3. 91歳男性 +
	4. 51歳男性 +
	5. 62歳女性 +
	6. 56歳女性 +
	7. 52歳女性 +
	8. 53歳女性 +
	9. 77歳女性 -

Fig. 3 MOEは2例とも外耳道炎としての治療歴があり、SCCでは9症例中8例に治療歴があった。

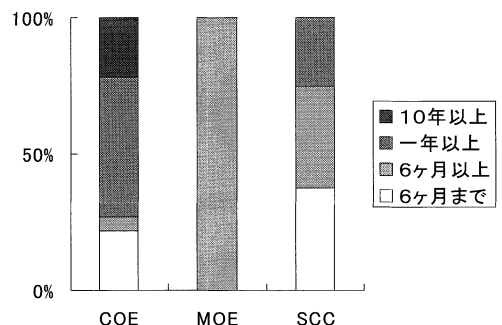


Fig. 4 MOEは全例病悩期間1年以内であった。10年を超える症例が認められたのはCOEのみであった。

える症例が少なからず認められ、1年以上の症例を加えると70%を越えた。MOEは2例ではあるが2例とも6ヶ月以上1年未満であり1年を越える病悩期間を有する症例はなかった。SCCは6ヶ月を越える症例が60%を越え、1年以上の症例も2例、25%認められた。しかしながら、病悩期間が10年を越える症例はなかった。

(3)MOE, SCCそしてCOEの糖尿病合併率について (Fig. 5)

糖尿病の合併率では、MOEが2例中2例、100%であり、SCCでは9例中3例、33%に糖尿病の合併が認められた。一方、COEでは41例中7例、17%に糖尿病の合併が認められた。

(4)片側性か、両側性かについて (Fig. 6)

MOE, SCC共に片側性であり、COEでは18例、43.9%が両側であった。

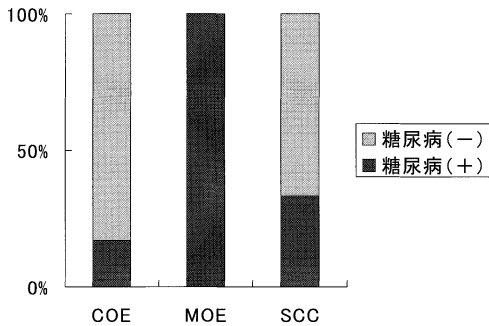


Fig. 5 MOEは2例とも糖尿病を有し、SCCとCOEでも少なからず認められた。

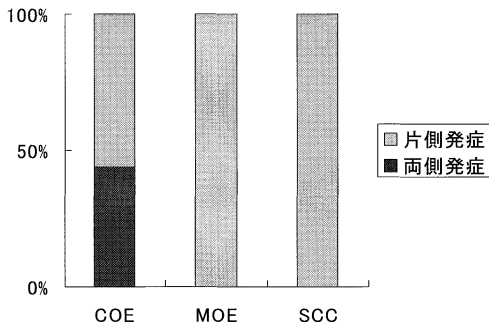


Fig. 6 病側が一側性か両側性か。COEでは、40%以上の症例が両側性であり、MOEとSCCは全例一側性であった。

(5)細菌検査結果について

MOEとSCCの症例全ての細菌検査結果をFig. 7に示した。MOEでは2例とも緑膿菌であった。SCCでは緑膿菌が9例中4例に確認され、MRSAも同様に4例確認された。そこで緑膿菌とMRSAを中心にCOE症例と合せて3者の比較を行った (Fig. 8)。COEでは常在菌と報告された例が最も多く、次いで緑膿菌とMRSAがほぼ同等であった。

次いで、片側性と両側性のCOEと検出される細菌に差異があるか否かを検討した。

MRSAは両側性で18例中2例11.1%、片側性で23例中5例21.7%、緑膿菌では両側性が18例中6例33.3%、片側性が23人中2人8.7%であった。

考 察

悪性外耳道炎 (MOE)、悪性外耳道腫瘍 (SCC) そして慢性外耳道炎 (COE) は共に外耳道の疾

悪性外耳道炎(MOE)		悪性外耳道腫瘍(SCC)	
1. 66歳男性	<i>Pseudomonas aeruginosa</i>	1. 50歳男性	MRSA
2. 72歳男性	<i>P.aeruginosa</i>	2. 59歳男性	<i>S.aureus</i>
		3. 91歳男性	<i>P.aeruginosa</i>
		4. 51歳男性	MRSA
		5. 62歳女性	<i>acinetobacter</i>
		6. 56歳女性	MRSA
		7. 52歳女性	<i>P.aeruginosa</i>
		8. 53歳女性	MRSA, <i>Serratia</i> , <i>P.aeruginosa</i>
		9. 77歳女性	<i>P.aeruginosa</i>

Fig. 7 MOEとSCCとの細菌検査結果
MOEは2例とも緑膿菌であり、SCCは殆どがMRSAか緑膿菌であった。

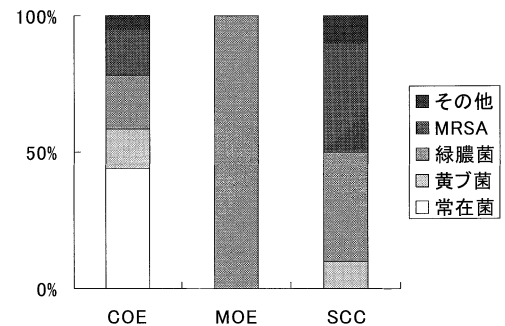


Fig. 8 COEでは常在菌がほぼ半数であった。これら症例は外耳道湿疹と思われた。

患であり共に外耳道炎として加療歴を有している⁽¹⁾。3者ともに早期より其々の疾患に成るべくして発症したのか、或いは早期は急性外耳道炎であり経過が長引くにつれ慢性外耳道炎に至り或るものはMOEに変化し、或るものはSCCに至り、或るものは変化せず慢性外耳道炎のままであるものなのか臨床上非常に興味のあるところである (Fig. 9)。MOEとSCCの視診上の所見は共に外耳道の腫れであり、症状も共に強烈な耳の痛みである⁽¹⁾。これら所見と症状はCOEにても大きな差異はない。COEはMOE、SCCに比して圧倒的に頻度の高い症例であるが、外耳道の腫れと耳の痛みを訴えた病悩期間の長い患者に遭遇すればMOEとSCCを安易には否定できない。そこで細菌学的検査を含め上記3者の相違点、類似点について検討を試みどの様なCOEであれば比較的安心であるかを検討した。検査結果を今一度簡単に示しながら考察を加えて見る。

=年齢分布=

MOEは2例とも高齢者であったが、高齢者に多いことは本疾患特徴の一つである⁽²⁾。SCCはMOEほどではないが中高年の疾患である。COEも中高年に多いが30歳未満の若い症例も認められた。3者ともに高齢者が多いことは、高齢者に皮膚萎縮がありしばしば掻痒症を起こしやすく耳掃除などで損傷されやすいためとされる⁽²⁾。

=外耳道炎の治療歴と病悩期間について=

MOEは2例とも当科受診前は外耳道炎として加療されており、SCCも9例中8例までが最近ま

で外耳道炎として治療を受けていた。COEは勿論のこと外耳道炎として治療を受けている。3者ともに外耳道炎としての治療期間は8週を越えておりCOEとも診断できる。病悩期間で興味あるところは、COEのみが10年を越える治療歴を有することであり、換言すれば10年を越えた治療歴を有するCOEは最早MOE、SCCに変化はしないとも言える。変化するものであれば、より早期に変化するものであると理解できる。特にMOEでは病悩期間が1年を越える症例はなくMOEになるべく症例は早期にCOEよりMOEに変化すると考えられる。

=糖尿病の合併率=

MOEの多くの症例が糖尿病を合併する⁽²⁾ことは周知であるが、当科での2症例も糖尿病を有していた。これは、必ずしもMOEに特徴的なことでなくSCC、COEにおいてもその合併は少なからず確認できた。しかしながら、明確な統計はないもののSCCの糖尿病合併率は喉頭癌患者の糖尿病合併率より高い傾向にあり、同様にCOEの糖尿病合併率は慢性副鼻腔炎患者のそれより高い傾向にあると推察する。実際、COEの内因として糖尿病、免疫不全が指摘されている⁽³⁾。結論として糖尿病を有するCOE患者はMOEないしSCCに変化する可能性が合併しない症例に比して高いものと推察した。

=片側性か両側性か=

MOE、SCC共に片側性であったが、COEでは両側性が43.9%と高い数値を示した。この事実は両側性のCOEはMOE、SCCに変化しないことを示している。

=細菌学的検討=

MOEの起炎菌として緑膿菌はその特徴の1つ⁽¹⁾あることも周知されているが、緑膿菌はSCCにおいてもCOEにおいても比較的高率に検出される。SCCにおいてはMRSAも多く認められたが、MOEの起炎菌がMRSAであった症例も報告されている⁽⁴⁾。MOEとSCCにおいて外耳道で検出される細菌の大半は緑膿菌かMRSAであると捉え

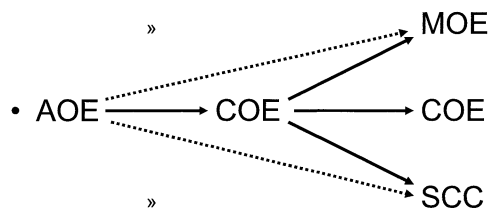


Fig. 9 急性外耳道炎 (AOE) を経てCOEに至り、それら症例の極稀な例がMOE、SCCにいたるものとする。

ることができる。一方、COEでは常在菌と報告された症例も多かったが、これは症状・所見の程度を考慮せず耳の痛み・痒みが長期に継続した患者を全てCOEとしたことに起因すると考えている。即ち、COEと診断された中には感染を伴っていない外耳道湿疹が含まれていたと捉えている。実際、外耳道炎と外耳道湿疹の鑑別は不可能と思われる⁽³⁾。MOEとSCCに両側性が認められなかったことより、又報告も殆んどないことより両側性のCOEはMOEとSCCに変化しないと推論したが、細菌学的には両側性と片側性とでMRSAないし緑膿菌が検出される頻度は両側性に多いことより、MRSAないし緑膿菌がCOEを他の2者に変化を誘導する大きな誘引ではないものとも考えられた。

最後に今回報告したCOEが将来MOEないしSCCに変化するものかを検討してみた。

COE41例中MOEの特徴を有する症例は、高齢

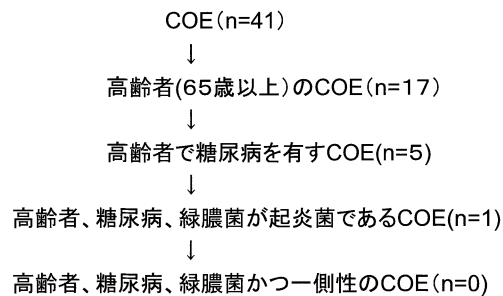


Fig. 10 今回対象したCOEの症例の中にはMOEの特徴をすべて満たす症例は無かった。

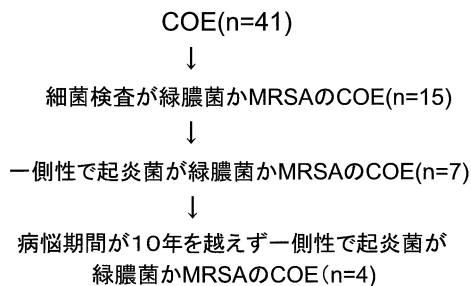


Fig. 11 今回対象としたCOEの症例の中でSCCの特徴をすべて満たした症例は4例認められた。

者・糖尿病・緑膿菌・1側性を考慮すると1例も認めなかった (Fig. 10)。COE41例中SCCの特徴を有する症例は、病悩期間・MRSAないし緑膿菌・1側性を考慮すれば4人となった (Fig. 11)。この結果より、今回対象としたCOE症例ではMOEよりSCCへの変化を考慮する必要があると考えた。SCCの診断には患者に負担の掛からない外耳道擦過細胞診が有用との報告⁽⁴⁾があり、上記4例のうち痛みを訴えた2例のCOE患者に外耳道擦過細胞診を行ったが2例とも炎症所見のみであった。

ま と め

悪性外耳道炎、悪性外耳道腫瘍 (SCC) は共に長く外耳道炎の治療歴を有している。慢性中耳炎がそれら疾患の発生母地となるとするとの様な症例が悪性外耳道炎ないし悪性外耳道腫瘍 (SCC) になりにくいものかを検討した。悪性外耳道炎は、高齢者で糖尿病を持ち病悩期間は1年以上であるが10年を越えることはなく片側性で緑膿菌が認められた。悪性外耳道腫瘍 (SCC) は中高年で糖尿病を有することもあり病悩期間は長い症例は少なく10年を越える例はなかった。片側性で緑膿菌、MRSAが多い。慢性外耳道炎は中高年に多いが若い例もある。糖尿病を有する例もあり病悩期間が10年を越える症例もめずらしくない。両側性で緑膿菌、MRSAも見られるが常在菌が最も多かった。3者で大きな相違点は、慢性外耳炎では両側性があり、病悩期間が10年を越える例があり若い症例もあることである。従って、慢性外耳道炎で両側性の患者、病悩期間が10年を越える例、若い症例は悪性外耳道炎ないし悪性外耳道腫瘍 (SCC) には変化しない可能性が高いと言える。

参 考 文 献

1. 金 義慶, 他; 悪性外耳道炎と悪性外耳道腫瘍 (扁平上皮癌) との比較. 耳鼻51; 掲載予定.
2. 浜野巨志, 他; 悪性外耳道炎の2症例. 耳鼻48; 235-242, 2002.

3. 新川秀一；慢性外耳道炎，CLIENT 21-21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床（外耳と中耳），中野雄一編，80-84頁，中山書店，東京，2000.
4. 原田勇彦；悪性外耳道炎の現状. JOHNS 14；1069-1073, 1998.

連絡先：金 義慶
〒573-1191
枚方市新町2丁目3番1号
関西医科大学 枚方病院耳鼻咽喉科
TEL 072-804-0101